

東京日々新聞

八百六拾五號



日向国高千穂山の
神代の古蹟あり此山中の
高千穂村の素より頑固土地
ありて人の心も直からん米さへ
るて常々食ふ物い
栗神のころは其村内の農氏小
儀太郎と呼者ありし其過日世と去
りて独り荒れ暮らる又此近傍へ折々
来て古交高小女あり儀太郎亦て知己あり
りや明治七年四月上旬或日晩景彼の女
風来て泊り

千穂村儀太郎

心無義知て其役女と投書
所持の金鏡品物と
奪取とも四隣まで
遠く離れ一軒家
誰知る人も嵐あり



萬壽
芳幾
印

實に可哀なり人心
無慈悲のやも思ふ夫より半月余もして此村内の
飼犬の斬首唾て来りて人々驚き其所此所と珍家
あせし儀太郎の腕の後に見別る女の死骸を流孤

温克龍吟誌

墨陀西岸
見出て俄に懸懸へ
訴ふまへ即持儀太郎ハ
捕縛ぬ嗚呼我神國の徳よりや
天此夫を以て先徒を隱患と亮然
とせり一怒り又尊茶べき
事よこせ

野具史房
彫
春